

夜間中学で学ぶ高齢者の知識獲得と理解認識の方法 —授業での参与観察を通して—

北原 佑哉

私たちは子どもの頃に文字の読み書きを覚えて以来、毎日のように文字に触れ、知識や情報を獲得して生きてきた。活字の溢れる現代社会において、文字から意味をくみ取り理解する能力は、生きていく上で欠かせないものであるように思える。そのような中、学齢期に学校へ通えず、読み書きを十分に習得できないまま高齢をむかえた人たちが我が国には存在していて、現在彼らが夜間中学という場所で読み書きを中心に学び直している。私は読み書きができない状況で、彼らがどのように知識や情報を獲得して生きてきたのかに興味を持った。また、彼らが夜間中学での学びの中で文字や新たな知識に触れていくとき、私たちとは異なる理解認識をしているのではないかと思うようになった。本研究では、夜間中学で高齢者が学んでいる様子を調査し、彼らが文字をどのように捉え、知識を獲得してきたのかを考察していく。

調査先として松戸自主夜間中学を選択し、週に2回の約1カ月間、授業での参与観察を中心に調査を行った。観察では、調査対象者の授業時の発言や様子に着目し、彼らが授業で習う知識や文字に対して、具体的にどのように感じ、考えているのかを探った。また授業外でも、調査対象者や夜間中学にいる他の人たちとラポールを築き、多角的に観察を行うことができた。

調査の中で、特に調査対象者の理解認識に関わる言動を観察することができた国語と社会の授業での観察記録を基に分析を行った。観察記録からはまず、調査対象者がある程度難しい漢字について、意味も理解し読むこともできるが、正確に書きとることはできない読み書き能力の状態にあることがわかった。また、調査対象者に特徴のある2つの認識の方法を読み取ることができた。一つは、調査対象者が漢字をぼやっとした認識で捉えていることである。もう一つは、彼らは授業で漢字や歴史を学ぶ過程で、自らの知識や経験してきたことの再認識の作業を行っていたことである。

今回の調査対象者は学齢期に十分に学習することができなかった。それでもまったくの読み書きできない状態にあるわけではなく、漢字を読みその意味を理解することができていた。活字が溢れている現代社会では、生きていくために分からない漢字に触れざるを得ない状況が多々存在する。彼らはそのような中で、家族などから漢字の意味を耳で聞いてひとつずつ覚えていくことで、これまで知識を獲得してきたのではないのだろうか。また、彼らは夜間中学での授業を通し、今までぼやっと捉えていた漢字一文字一文字や自身の知識や経験と向き合うことで、学齢期に学ぶことのできなかったことの埋め合わせ作業をしているのではないのだろうかと思ふ。

(指導教員 武者小路澄子)